

沖縄における県外産シキミ苗の栽培特性

沖縄県宮古農林水産振興センター 東江 賢次
やんばるシキミ生産組合 宮城 藤夫

Growing characteristics of *Illicium anisatum* in Okinawa

Kenji AGARIE (Miyako Agriculture, Forestry and Fishery Promotion Center Okinawa Pref.)

Fujio MIYAGI (Yanbaru Shikimi Farmer's Association)

1 はじめに

シキミ (*Illicium anisatum*) は、宮城県・新潟県～九州の山地に分布している樹木で、西日本地域で古くから仏前に供える枝物として利用されている。県外のシキミ市場は、冬は霜の害により、また春は新芽のため品薄になる。

沖縄でシキミを栽培すれば、温暖で霜の心配はなく、また、新芽の時期も他県より早い
ため、端境期に出荷できることが期待できる。

沖縄本島の山地には、オキナワシキミ (*Illicium anisatum* var. *masaogatai*) が生育している。シキミと比べると葉は細長く、節間がやや長い特徴がある。また、石垣島と西表島にはヤエヤマシキミ (*Illicium tashiroi*) が自生している。葉が大きく、節間が長いという特徴がある。このように沖縄のシキミは形態が異なるため、市場性に不安がある(写真-1)。

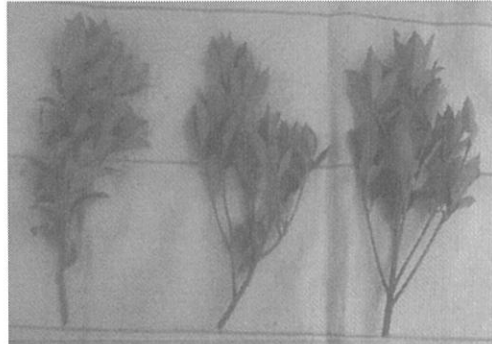


写真-1. 各シキミ種の枝
左：シキミ、中：オキナワシキミ、
右：ヤエヤマシキミ

そのため、2004年から2006年にかけて約8,000本のシキミ苗を県外から移入して栽培試験を実施したところ、次に示す結果となった。

- ① 酸性性土壌で、排水良好な土地では他県と同様以上の収量が期待できる(写真-2)。
- ② クロフオオシロエダシャク (*Pogonopygia nigralbata*) が5～6月に大発生し、激しい食害を受けると枯死に至る。
- ③ 台風の強風によく耐える。
- ④ 沖縄で栽培したシキミは、冬季も濃緑であり、市場性が期待できる。

シキミは適地を選んで植栽し、クロフオオシロエダシャクの防除をすれば、沖縄県で経営が成り立つ可能性が見出された。(2007年亜熱帯森林・林業研究発表会論文集参照)



この結果を受けて、やんばるシキミ研究会は約4万本のシキミ苗を県外から導入し、2008年

写真-2. 良好な生育を示した試験圃場
2007.7

に約2ヘクタールの実証圃場を造成して、観察を続けてきた結果、沖縄における県外産シキミ苗の栽培特性について、一定の知見を得ることができたので、ここに報告する。

なお、やんばるシキミ研究会は、実証圃場の造成を期にやんばるシキミ生産組合に名称変更した。

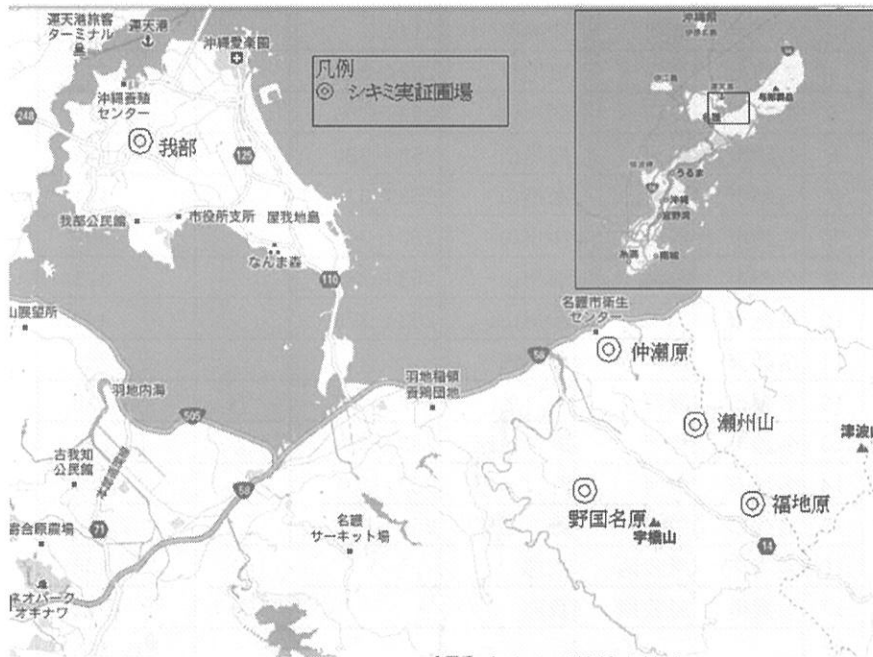
2 実証圃場の位置と植栽方法

圃場は、排水良好な箇所を求めて、山地の尾根部に開墾された箇所に確保することを原則とし（図－1）、事前に土壌酸度測定を行い、酸性土壌であることを確認した。

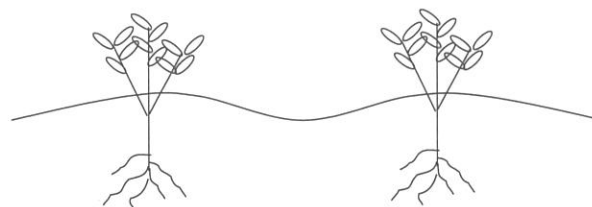
2007年12月に鹿児島県から約4万本のシキミ苗を移送し、仮植えをしておいて（写真－3）、17箇所の圃場（表－1）の整地や耕耘を行い、2008年3月～5月にかけて植栽した。

植栽は、鹿児島県で一般的に行われている方法に準じて、トレンチャーで40cmほどの深さの溝を掘って、その中に深植えした（写真－4）。

深植えの狙いは①強風への耐性の増大 ②不定根が発生することによって根量が増大し、生長が促進されることにある（図－2）。



図－1．シキミ実証圃場位置図



図－2．シキミ植栽模式図



写真－ 3． 移入した苗を仮植 2007.12



写真－ 4． 実証圃場への植栽 2008.4

表－ 1． シキミ実証圃場一覧表

no	市町村名	字	小字	地番	畑no	面積 m2
1	名護市	源河	仲瀬原	2114-1	①	769
2	名護市	源河	仲瀬原	2114-1	②	254
3	名護市	源河	仲瀬原	2114-1	③	735
4	名護市	源河	福地原	2534-65		2,148
5	名護市	源河	瀬州山	2534-169	①	917
6	名護市	源河	瀬州山	2534-320	①	1,774
7	名護市	源河	瀬州山	2534-320	②	431
8	名護市	源河	瀬州山	2534-346		997
9	名護市	源河	瀬州山	2534-345		321
10	名護市	源河	瀬州山	2534-379		442
11	名護市	源河	集落内			330
12	名護市	源河	野口名原	2534-207	①	1,320
13	名護市	源河	野口名原	2534-207	②	1,650
14	名護市	源河	野口名原	2534-207	③	3,300
15	名護市	源河	野口名原	2534-206		2,640
16	名護市	屋我地	我部		①	436
17	名護市	屋我地	我部		②	922
計						19,385

3 肥培管理から出荷、虫害の発生

植栽後の管理は、畝立てをし、適宜、除草、施肥をした。クロフオオシロエダシヤクが大発生する5月から6月には薬剤防除を実施した。

生長したシキミの一部は収穫し、くくり製品にして、県内生花店に出荷した。植栽後約2年が経過した頃には、ほぼ期待どおりの生長があったので(写真－5)、2010年1月に県外市場に向けての出荷作業を行い(写真－6)、1,750Kgを出荷することができた(表－2)。その翌年以降は毎年倍増の出荷が見込まれた。

2007年までの試験栽培時から5月～6月にクロフオオシロエダシヤク(写真－7、8)

の大発生は見られ、その時期には圃場巡回を密に行い、薬剤防除を実施していたが、2010年12月には冬期において初めてのクロフオオシロエダシャク大発生があり、防除が遅れてシキミの商品価値が失われ（写真－9）、2011年の県外出荷ができなくなってしまった。

2011年は、5月～6月にかけてクロフオオシロエダシャクが大発生し、引き続き食害によりシキミは衰弱し（写真－10）、枯死に至るものも少なくなかった。そのため、県外出荷のみならず、県内への少量の出荷分さえも確保できない状況で、2011年の出荷はまったくなかった（表－2）。さらに2012年2月にもクロフオオシロエダシャクの激しい食害を受けた圃場がある。

このようにクロフオオシロエダシャクは夏場の8月、9月を除いてほぼ年中大発生することが分かった。

他に実証圃場で発生し、商品価値、又は生育に大きな影響を与えた害虫としては、シキミグンバイムシとコミカンアブラムシがあげられる。

また、植栽後1～2年は順調な生育を見せていた圃場でも、平坦で重粘質土壌の箇所は次々と枯死する状況が発生している（写真－11）。

表-2. やんばんるシキミ 生産組合出荷実績推移

年	出荷量 Kg	内 訳	
		県外	県内
2006 (H18)	0	0	0
2007 (H19)	541	387	154
2008 (H20)	107	0	107
2009 (H21)	160	0	160
2010 (H22)	2,156	1,750	406
2011 (H23)	0	0	0

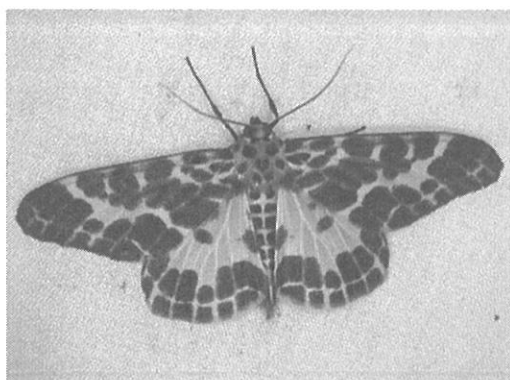
2006年までに植栽した試験圃場からの出荷も含む。



写真－5. 植栽後約2年 2009.12



写真－6. 県外出荷作業 2010.1



写真－7. クロフオオシロエダシャク成虫



写真－8. クロフオオシロエダシャク幼虫



写真－ 9. 冬期にクロフオオシロエダシヤクの激しい食害を受けた圃場 2011.1



写真－ 10. 度重なるクロフオオシロエダシヤクの食害で衰弱した圃場 (2011.6)



写真－ 11. 排水不良により欠株が生じた圃場 (2012.7)

4 まとめ

実証圃場での4年間の栽培経験から次のことが明らかとなった。

- ① 酸性土壌であっても、粘質土壌等で排水が不良な箇所では1～2年は順調な生育を示しても徐々に衰退し枯死するため、栽培に適する圃場が極めて限定される。
- ② クロフオオシロエダシヤクが8月から9月の一時期を除いてほぼ年中発生し、防除が遅れると枯死に至る。特に梅雨期においては、大発生するが、晴れの日が少ないため、薬剤防除の実施が困難である。
- ③ 害虫の薬剤防除を月に1～2回程度実施する必要がある、それに要する労力と費用から沖縄におけるシキミ栽培の継続と採算の確保は困難である。